

茂吉の『梁塵秘抄』受容：白秋作品の介在

前田，知津子
九州大学大学院比較社会文化学府

<https://doi.org/10.15017/24630>

出版情報：Comparatio. 14, pp.47-56, 2010-12-20. Society of Comparative Cultural Studies,
Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



茂吉の『梁塵秘抄』受容——白秋作品の介在——

前田知津子

はじめに

茂吉における『梁塵秘抄』受容に関する既存の研究は、どの時期の作品の語句・文脈に『梁塵秘抄』の影響が見出されるか、という作品分析に力点の置かれた論考が主軸である。その流れの中で、茂吉作品への『梁塵秘抄』の影響を後年まで認めるか否かという議論がなされた。さらに作品分析には、同様に『梁塵秘抄』の影響の顕著な北原白秋作品との類似を指摘する論述もしばしば加わる。茂吉における『梁塵秘抄』受容に関する研究傾向は以上のように概括できるであろう。

作品中の『梁塵秘抄』の影響に言及した論考に、荒井源司「斎藤茂吉と梁塵秘抄」がある。同論文は、短歌雑誌「群山」に昭和三十九年一月、三月、四月の三回にわたり、それぞれ、(一)〈二〉〈三〉として発表されたものであるが、これは、昭和二十二年一月に発表された新聞進一の「現代詩歌の源流としての梁塵秘抄」(注1)を踏まえた上で論じられている。前述の、後年まで茂吉の作品にその影響を見るか否かについての議論も両者の間で行われた。また、白秋作品との類似にも触れながら『梁塵秘抄』の影響を指摘した論考には、塚本邦雄の『茂吉秀歌』あらたま『百首』(昭和五三年九月、文藝春秋)や『斎藤茂吉』(鑑賞

日本現代文学第九巻、昭和五六年一〇月、角川書店)などがある。茂吉における『梁塵秘抄』受容の問題のうち、後年の影響に関する論考が見られることはすでに述べたが、初期の受容のあり方については、『梁塵秘抄』受容史の視点からの概論的、断片的な記述があるばかりで、まとまった論考は見当たらない。このような研究状況に鑑みて、本稿では、茂吉の『梁塵秘抄』受容の初期のあり方を明らかにすることを目指す。まずは、受容史の一側面として記述された言述を確認することから始める。

一 『梁塵秘抄』受容史における茂吉の位置づけ

新聞進一は、『梁塵秘抄』(日本古典文学全集第二五巻、昭和五一年三月、小学館)の「解説」において、『梁塵秘抄』受容の初期の様相を次のように記述している。

長い間埋没していた巻第二の公刊(大正元年八月——引用者)は、学界を驚かせただけでなく、詩人・歌人たちに深い衝撃を与えずにはいなかった。公刊直後の大正二、三年ごろの詩歌作品にまずその発現を見る。若い斎藤茂吉や北原白秋は、時期を同じくして『梁塵秘抄』の新鮮な響きを受けとめ、その詩囊を肥やした。(注2)

また、佐佐木幸綱は、『梁塵秘抄』と白秋・茂吉・信綱(一九九九年二月、朝日新聞社)(注3)の中で次のように述べている。

これ(『梁塵秘抄』の刊行——引用者)にシャープに反応

したが、北原白秋、斎藤茂吉、森鷗外、佐藤春夫ら当時の若い詩歌人であった。とくに白秋の『雲母集』と茂吉の『あらたま』は、『梁塵秘抄』の痕跡が顕著な歌集として知られている。

これらの文章から分かるように、『梁塵秘抄』の刊行に「深い衝撃」（新聞）を受けた、あるいは、それに「シャープに反応した」（佐佐木）という文脈において茂吉の『梁塵秘抄』受容の初期のあり方は理解されてきた。新聞は、右の文章よりも早く昭和二年（注4）に、『梁塵秘抄』の刊行が「学界の一大驚異」であり、「たゞに学界のみならず広く実作家として文芸の道に携はる人々の間に、好奇と歓喜」をもつて迎えられたと記しているが、このような『梁塵秘抄』受容史の一側面がそのまま茂吉に適用され今日に至った、それが実状ではないだろうか。

確かに茂吉は、『梁塵秘抄より』（注5）という文章を書き、『梁塵秘抄』の魅力を分析している（注6）。また実際に、『梁塵秘抄』の影響の顕著な歌も残し、数種の短歌作品についてはみずから解説し『梁塵秘抄』からの語句や文脈の摂取を明らかにしてもいる（注7）。茂吉を『梁塵秘抄』受容歌人として自他に無論異存はない。

しかし、『梁塵秘抄』刊行に接した際、茂吉は「深い衝撃」を受け「シャープに反応した」のだろうか。この問題について、本稿では、先に引用した新聞・佐佐木の言述中に名前の挙がっていた北原白秋を仲立ちとして考察する。両者は機会あるごとに併称され論じられてきた。ここで問題とする大正三年前後の両者の親

密な交流も繰り返し論じられてきたが、本稿では、茂吉の『梁塵秘抄』受容を解明する立場から両者の交流を見ていきたい。白秋を仲立ちとすることで、茂吉と『梁塵秘抄』との二点に注目するだけでは見えてこない契機や経緯が見えてくるという理由からである。

二 『赤光』後の試みと白秋の『梁塵秘抄』影響作品への関心

すでに指摘されているように、茂吉の積極的な『梁塵秘抄』受容は、第二歌集『あらたま』の初期にあたる大正三年に集中的に見られる。具体的な『梁塵秘抄』からの語句の摂取は、大正三年二月五日の「読売新聞」に発表された「一心敬礼」であり、この語句は一連の作品の表題として採用された。『梁塵秘抄』影響歌の代表作としては、その夏、三浦に赴いたときの取材にもとづく「海浜守命」及び「三崎行」の歌群が挙げられよう。後年のことであるが、茂吉はこの二作品の中から計五首を引き次のように述べている。

『金のまさごの揺られくる』あたりは、梁塵秘抄あたりの影響が顕著で、そのころ明治書院から出た梁塵秘抄を読んできりにその模倣をした。此処の五首には、その梁塵秘抄と仏蘭西を中心とした近代画、即ち印象派以後の影響があるのである。（注8）

ここには引かなかったが、茂吉が引用した作品は、一首目が大正三年九月創刊号の「地上巡礼」に、他の四首が同年一〇月の

「アララギ」に発表されたものである。右の引用文中茂吉は、「梁塵秘抄を読んでしきりにその模倣をした」と当時を振り返っているが、そうしたことの背景には、茂吉の歌人としての切実な問題があった。「あらたま編輯手記」の記述を見てみよう。

大正二年から掛けて大正三年四年は、僕の歌が一転化を来さうとして、いろいろの事をやつて居る。内容も外形も共にさうであるが、今目立つのは重に外形のやうである。さうして是等の変化は、自発的のものが多く、読書により絵画彫刻などを鑑賞したことにより友との交流によつて所働的にもなされてゐる。

『梁塵秘抄』をしきりに「模倣」した大正三年が、茂吉にとつてどういう時期にあたつていたかが分かるであらう。「一転化」を来すべくあらゆる試みをみずからに課していたのである。『梁塵秘抄』の「模倣」はその試みの一つであつた（注9）。

「模倣」へと茂吉を駆り立てたのは何だったのだろうか。このことを念頭に置き、大正三年九月の「アララギ」に掲載された茂吉の評言を見てみたい。前号に掲載された白秋の一首「山峡に橋を架けむとかがやくは行基菩薩か金色光に」に対する作品評である。

二ヶ月に互つて連載された文章世界の数十首とアララギの一ページの歌は近來僕の讚歎して読んだものである。浮世絵の風景画などの構図とその色彩から来る気分、芭蕉あたりの芸術の澄んだ寂の境、今は過去世の仏者の心境、さういふものに氏は近ごろ自己の生命を打込み来つたのでは

あるまいか。そして自己の芸術となつて外へ発するに及んでは寂しく澄み耀き止まざらんとする尊形となり了せたのではあるまいか。

これによつて、どのような白秋作品に感銘を受けたかを具体的に知ることができる。「二ヶ月に互つて連載された文章世界の数十首」とは、同年七、八月の「文章世界」に掲載された作品を指し、「アララギの一ページの歌」は、前号の巻頭二頁目に掲載された「臨海小景」「山中秋景」を指す。ここで茂吉が「讚歎」した作品の多くは、『梁塵秘抄』の影響のおよぶ作品であり（注10）、『雲母集』（短歌、大正四年八月）に収録されている。このほか、『梁塵秘抄』の影響が顕著な白秋の作品集として、『真珠抄』（短唱、大正三年九月）、『白金之独楽』（詩、大正三年一二月）が挙げられる。これら三作品集は、三浦三崎や小笠原父島の海辺に流浪していた時期の取材にもとづく。

このうち、雑誌に掲載された早いものは、大正二年九月の「スバル」に「真珠抄」の題で掲載された三九章の短唱であるが、これに感銘を受けた茂吉は、次のような書簡を白秋に書き送った。

スバルの真珠抄くりかへして読んでゐます。私共も、何とかしなければなりません（九月一〇日、書簡二九一）

同書簡は、古泉千樫との寄せ書きであり、「何とかしなければなりません」の口吻が、当時アララギが低調だったことを伝えている。先に、茂吉の「一転化」の試みについての文章を見たが、事態は茂吉一人の問題ではなくアララギに関わる問題であつた。こうした時期に発表されて茂吉を刺激した白秋作品が、『梁塵秘

抄』の影響を受けた作品群だったことは押さえておきたい。

茂吉が、この時期の白秋作品の『梁塵秘抄』的要素に意識的であつたことは、大正十一年一月にアルスから刊行された斎藤茂吉選『北原白秋選集』の序において、「札讀から出立した梁塵秘抄の歌と、南画あたりの簡素味と、芭蕉などが悟つた寂び細み等の要素をも考へることが出来る」の一文からも窺われる（注11）。

ここで取り上げた両者の作品の発表時期を整理すると、白秋の「真珠抄」、同じく「臨海小景」「山中秋景」、次いで茂吉の『梁塵秘抄』影響歌の中核をなす「海浜守命」「三崎行」の順次である。この点を押さえておき、さらに白秋宛書簡によって、茂吉の『梁塵秘抄』受容の経緯をたどってみたい。

三 大正二、三年の白秋宛書簡より看取できる『梁塵秘抄』との距離

茂吉と白秋の出会い、鷗外主宰の観潮楼歌会まで遡る。その後茂吉は、白秋の求めに応じて、大正元年九月の「朱鸞」に「蔵王山」を寄稿し、大正二年一月に「冬来」を寄稿している（注12）が、両者の親交が深まりを見せはじめるのは、書簡の確認できる大正二年の半ばごろからと言つてよいだろう（注13）。

『全集』によって確認できる白秋宛書簡の早い日付は、大正二年六月一六日（書簡二七〇）であり、これには「アララギ」への寄稿を依頼する一文が見える。

一二月三日には、「今迄ヒソカニ敬礼絶エザル貴堂ニ賞メラレ

候^{（マ）}ヘシトキノ小生ノ心御推察下サレタク候小生モ仰セノゴトク地上巡礼ノ心ヲ持シテトホクトホク行クベク候。コノ念常ニ焚焼シテ止マズ候」（書簡三〇〇）と書き送っている。「地上巡礼」は、翌年の九月に創刊されることになる白秋主宰の雑誌名であると同時に、『梁塵秘抄』的要素でもあり、大正二年五月の三浦三崎移住以後の白秋を考える上で欠かせない視点である。この時期の茂吉は、白秋の「地上巡礼ノ心」に近く寄り添っていたように思われる。

大正三年に入ると、まず、年賀に「あの日は何とも忘れる事の出来ない日でありましたあれから貴君の作拝読しました、そして一つ一つ小生も膨大します。（中略）小生も何とかして歩みたいとおもひますどうか見棄てずに下さい」（書簡三〇八）と、白秋の作品に啓発されたような文面が見える。

四月一日には、「今夕青山の書店にて偶然婦人評論といふ雑誌を見、大兄の歌発見せり、さうして驚きて小生の身より光が出んばかりに候、このよろこびと心の張りとを人に分けてやるのが惜しいとおもふ。右感謝まで（後略）」（書簡三二三）というような茂吉の気分の高揚がよく表われた書簡も見られる。

そして、特に注目されるのが、この年の夏の間に出された四通の書簡である。七月二六日には、

コノゴロ歌何トシテモ工合ワロク煩悶侍居り候、コノ際貴家ノ芸術ノ光明ニ触レタシ（書簡三四五）

と書き、八月七日には、

御近作小生讃嘆します。なぜ、かういふ潜光があるものを

御詠みになるかという考へてゐます。(中略)文章世界のものはぬ金無垢の弥陀の重さよ難有く候(書簡三五〇)

と書き送っている。「貴家ノ芸術ノ光明ニ触レタシ」「なぜ、かういふ潜光があるものを御詠みになるかという考へてゐます」などの言葉には、茂吉の白秋作品に対する手放しの讃嘆が表明されている。

八月七日の書簡で茂吉が引用している「ものいはぬ金無垢の弥陀の重さよ」は、大正三年八月一五日増刊号の「文章世界」のアンケート「一 好きな色は？」に白秋が応じたものであり、アンケートの回答がそのまま短唱となっている(注14)。この作品には「秘抄の世界に表れている仏教婦依の姿がみてとれる」(注15)との評がある。付言すると、全一六項目からなるアンケートには、「七 好きな書籍は？」の項があり、白秋は『梁塵秘抄』を挙げてゐる。

この時期の茂吉の目に、白秋作品はまぶしいものとして映っていた。八月二五日(書簡三五三)と三〇日(書簡三五四)の書簡が、三浦郡長井村から出されていることに注目させられる。なぜ、こういう「潜光」のある作品が詠めるのか、という白秋への羨望が、茂吉を三浦の地へ赴かせたのであろう。

二五日の書簡には、「この鄙の海岸にゐると大兄の歌の事益々分かる氣持いたし候。(中略)都合よろしければ三崎の方にもまゐりたく存じ居り候」とあり、白秋作品の生まれた契機を解き明かしたいというような心境にあったことが窺われる。そして、

この時の三浦での取材が『梁塵秘抄』影響色の濃い作品「海浜守命」「三崎行」として結実するのである。この年最後の書簡は、白秋から贈られた『白金之独楽』への礼状であつた(書簡三七二)。

この間には、白秋の方からも、茂吉の『赤光』に対して熱のもつた書簡(注16)が出されている。

赤光拝誦、涙こぼれむばかりに存候。純朴不二、信実にして而かも人間の味ひふるき兄が近業のごときは当代にまたとあるべくも無之候。兄は万葉以来の人、赤光は礼拝仕るべき歌集なり。小生ごとき不純鈍才の徒は寧ろ慚死すべきのみ。幸に御自愛下されたく候。なほあらためて心より真実なる尊敬を兄にささぐ。以後深く兄に親しみたし。無礼御ゆるし下され度候。(大正二年十一月十七日三崎にて)

以上、書簡によつて、白秋あるいは白秋作品に対する羨望や讃嘆の調子、そして八月の三浦行きなどを確認してきた。これらを『梁塵秘抄』受容の見地から捉え直してみよう。繰り返して引くことになるが、例えば、「貴家ノ芸術ノ光明ニ触レタシ」「御近作小生讃嘆します。なぜ、かういふ潜光があるものを御詠みになるかという考へてゐます」などの茂吉の言葉からは、白秋ほどの感激を持つては『梁塵秘抄』を受容できなかった様子が窺われるのである。そして、先に得た結果、即ち、茂吉の『梁塵秘抄』の積極的摂取の時期が、白秋の『梁塵秘抄』影響作品に接して以降のことであるという事実を考慮すると、そこから、『梁塵

『秘抄』に茂吉の目を向けさせたのは、白秋作品ではなかったかとの結論が導かれるのである。

それでは、茂吉はなぜ、「衝撃」をもって『梁塵秘抄』を受容できなかったのだろうか。次にそれについて考えてみたい。

四 茂吉の幼少年期——『梁塵秘抄』受容の素地の検討——

茂吉は四十代半ばになってから次のような文章を認めている。

僕は高等小学校を卒業しようとしたころ、将来にいろいろの空想を有つてゐた。併し直ぐ中学校などに入学させては呉れなかつた。僕は小学校のかへりに春も追々深くなつてゆく林中に寝ころんで、ひとつ絵かきの修行にでも出掛けようか、それとも宝泉寺の徒弟になつてしまはうか。

(中略) 百姓をしながら山蚕でも飼はうか。そんなことを思つて時を過ごすことが多かつた。(中略) 山蚕の写象は妙に僕を親しくさせ、また妙に僕を沈鬱にさせる。年はすでに初老を過ぎ、山蚕を見ざること十数年であるのに、その写象は殆ど幻覚にひとしいやうな現実性を以て、僕の眉間にあらわれてくるのはどういふわけであるかと思ふことがある。(注17)

「山蚕を見ざること十数年」経つにもかかわらず、その写象が「幻覚にひとしいやうな現実性」をもつて思い出されるのだと言う。故郷での幼少年期の経験が、いかに茂吉のうちに深く刻まれていたかが分かる文章といえる。茂吉が空想した将来の一つに、

「宝泉寺の徒弟」があるが、これは、時宗宝泉寺の住職佐原隆応に弟子入りすることを意味する。宝泉寺は守谷家の菩提寺であり、茂吉の家のすぐ傍にあつた。

金瓶学校の教員を経て、茂吉が生まれた翌年の明治一六年に宝泉寺の住職に就任した隆応は、金瓶の人々に深い感化を及ぼした。村の中心といつても過言ではない宝泉寺、そして隆応の存在は、茂吉の幼少年期を考える上で逸することができない(注18)。

宝泉寺は子供の遊び場であり、茂吉も宝泉寺でよく遊んだ。茂吉に『日本外史』や習字を教えたのも隆応であり、茂吉の人生の一岐路を決することになった上京について、斎藤紀一との仲立ちを務めたのも隆応であつた。また、茂吉の父の伝右衛門は、年下の隆応に常に敬意を払い、「宝泉寺の山門をくぐるときは必ず衣服をあらため」、「日に数万回の念仏をとなへ」るほどの「大の信心家」であつた。

このような父を持ち、日常的に宝泉寺に出入りする環境にあつた茂吉が、隆応の薫染を受け、仏教に関する知識を身に付けていったのは自然の趨勢であつたろう。隆応への尊敬の念や親愛の情については、茂吉自身も書き記しているところである。

仏教的雰囲気の中で育つた茂吉にとって仏教的なものは、何ら特別なものではなく、身体に沁み込んだものとなつていた。金瓶を離れた後も仏教的素養が表出する例は容易に見出される。

例えば、第一歌集『赤光』(大正二年一〇月)の歌集名を「仏説阿弥陀經」から採つたことが挙げられる。短歌作品にも例を見出すことはたやすい。『赤光』所収の「月落ちてさ夜ほの暗く未

だかも弥勒^{みろく}は出でず虫鳴けるかも」（明治四〇年作）の一首は、時宗『浄業和讃』『恩徳讃』（これは在家でも読誦される）の「釈迦の在世はすぎさりぬ、弥勒の出世ははるかなり」を典拠とする（注19）。また、知られているように、正岡子規の遺稿『竹の里歌』（明治三七年十一月）に触発されて「地獄極楽図」を作ったが、これは、宝泉寺で年に二回見る機会のあった地獄極楽図を思い出しながら作られた。

このように、仏教的素地の培われていた茂吉に、『梁塵秘抄』はどのように受け止められたであろうか。それは、懐かしく慕わしいものとして感受されることはあっても、「衝撃」をもって迫って来るものとはならなかったと考えられる（注20）。

本稿ではここまで、初期の受容のあり方として、『梁塵秘抄』の刊行に接した際の茂吉の反応とその理由、そして積極的摂取に至るまでの過程を資料を示しつつ考察してきた。

次に、茂吉の『梁塵秘抄』の受容を概括的に捉えるために、先に述べておいたように、先行研究で展開された後年の影響についての議論を見ておきたい。

五 後年の『梁塵秘抄』の影響について

既述のように、後年の影響についての議論は、新聞進一と荒井源司との間で行われた。これに関する論文は、冒頭で挙げた二論文、①新聞「現代詩歌の源流としての梁塵秘抄」（昭和二年一月）、②荒井「斎藤茂吉と梁塵秘抄」（昭和三年一月、三月、

四月「群山」に、（一）（二）（三）として掲載）に、もう一つ③新聞「茂吉と『梁塵秘抄』」（『全集』第二七卷月報一四、昭和四年二月）を加えた三論文である。新聞の見解に荒井が反論の意図をもって応じ、さらに新聞が反論した経過である。以下、要点を記す。

新聞は①の論文において、「大正三年あたりに作つた漢語や仏典語まじりの歌は、大正六年の夏には既にいろいろ気に入らなくなつて居た」との茂吉の言述にもとづき、「『あらたま』の歌を製作したころの作者にとつて、『秘抄』の魅力は絶大ではあつたが、それも一時的に取り入れられたものであつて、その後の作にはそれ程影響を及したものは見ないやうに思ふ」と述べた。これに対して、荒井は、②の（一）の論文で、①の新聞の見解は、茂吉自身の叙述にもとづいて立論されたものであるが、その当時は『作歌四十年』は未発表であり、『つゆじも』以下の歌集の大部分は未刊行であつたため、「こう考慮されたのは当然であつたと思う。（中略）新聞氏に所見を改めていただきたくなつて来た」と述べて、荒井自身は、「茂吉の歌には、終戦後まで梁塵秘抄の影響を受けたものがある」との見解を示した。

この荒井への反論として、新聞は③の論文で、「私には、結論的に言つて、『秘抄』の影響は潜在的であり、やはり茂吉の本格的な『秘抄』摂取は、初期の『あらたま』所収歌の成立した時点を中心と考えてよからうかと思われる」と述べている。

新聞のこの見解は繰り返すように、荒井への反論の形で述べられたものだが、果たしてこれは反論になっているだろうか。

荒井の論は、『あらたま』初期の摂取が中心であることが前提とされている。そこで、③の新聞の発言中問題となるのは、後年の影響に言及した「『秘抄』の影響は潜在的であり」の個所である。これが反論になっていないと考えられるのは、荒井は②の〈二〉の論文で、「おもうに青春時代に魂の底まで揺り動かされるような感動を受けたことは、記憶がうすれていつて、識閥の下に沈んでしまっても、その感動は消えずに影響が無意識の間に現われるのではなからうか」、同じく〈三〉の論文で「識閥下に潜んでいたのが、籠山比丘の實際生活を見て触発せられて出来た歌ではあるまいか」と述べているからである。

荒井は「潜在的」の語こそ用いていないが、意味するところは同じであろう。新聞の「影響は潜在的であり」の見解は、荒井の言述と対立しないと考えられる。

茂吉作品の後年における『梁塵秘抄』の影響の問題は、茂吉の書き残したもの（注21）や、荒井や塚本邦雄の作品分析による結果を総合して判断すると、塚本の「今様やこれに類する仏典中の文言等の影響は、この前後、あるいは後年にも、間歇的に見ることができる」（注22）という発言に集約されると言ってもよいだろう。ただし、塚本においては、『梁塵秘抄』の影響、という言葉は避けられている。

ところで、新聞が、①の論文において後年の『梁塵秘抄』の影響を否定したのは、「あらたま編輯手記」中の「大正三年あたりについた漢語や仏典語まじりの歌は、大正六年の夏には既にいろいろ気に入らなくなつて居た」との茂吉の発言に注目し、「いろ

いろ気に入らなくなつて居た」ものの内実を『梁塵秘抄』的要素に還元してしまつたことによる。ここに一つの問題があると考えられるため、稿を改めて検討したい。

おわりに

冒頭で述べたように、茂吉における初期の『梁塵秘抄』受容は、これまで、「深い衝撃」をもつて受け止められた、「シャープに反応した」との文脈で把握され、それ以上の踏み込んだ議論はなされていなかった。本稿では、大正二年の後半から親密になつていく白秋との関係、及び、幼少年期の茂吉を取り巻く環境を検討することによって、茂吉の『梁塵秘抄』受容の初期のあり方を明らかにすることを試みた。

その結果、仏教的雰囲気の中で育つた茂吉にとって、『梁塵秘抄』は、馴染み深い雰囲気を湛えたものではあつても「深い衝撃」を受けるほど特異に感じられるものではなかつたとの結論を得た。

当時、茂吉は、『赤光』の歌境から抜け出そうとあらゆることを試みていた。そういう茂吉の前に、「潜光」をもつた作品群が現われたのである。それが白秋の『梁塵秘抄』の影響を受けた作品群だったのであり、これが茂吉における『梁塵秘抄』の積極的受容の契機となつたと考えられる。

〔付記〕

一、本稿は二〇一〇年度日本比較文学会春季九州大会の発表原稿をもとに執筆した。なお、学会発表では、「あらたま編輯手記」の、「大正三年あたりに作つた漢語や仏典語まじりの歌は、大正六年の夏には既にいろいろ気に入らなくなつて居た」との発言を検討し、「いろいろ気に入らなくなつて居た」と茂吉が述べるものの内実を、『梁塵秘抄』的要素という以上に白秋の要素であつたのではないか、という試論を提示した。紙幅の関係上、これらの問題については、稿を改めて論じる。

一、本稿における『全集』は、『斎藤茂吉全集』（全三六巻、昭和四八―五一年、岩波書店）を指し、特に断らない限り、茂吉作品の引用は同集に拠つた。

一、本稿における引用文は、文意を損なわない限り、通用の文字に改めた個所がある。

注

（注1）『歌謡史の研究 その一 今様考』（昭和二二年一月、至文堂）所収。

（注2）引用は、昭和五二年七月の第三版に拠る。

（注3）冷泉家時雨亭叢書第一九巻『平安私家集 六』、月報三四所収。

（注4）新聞、前掲書、二四四頁。（注1）参照。

（注5）『全集』第九巻「後記」によると、この文章は、雑誌

「掲載状況未詳」であり、『童馬漫語』（大正八年八月、春陽

堂）初出と推定されている。

（注6）この分析には、次の新聞の評がある。「この「あはれ」といふ語の多いことに着目してゐるのは、「秘抄」の文芸性を論ずる上に如何にも適切であり、茂吉の歌人としての眼が感ぜられる」。前掲書、二四五頁。（注1）参照。

（注7）「82言葉のこと」（大正四年八月「アララギ」、『全集』第九巻）に、「去年発表した「海浜守命」以下数十首の歌言葉のなかには佐佐木氏和田氏等の尽力になつた「梁塵秘抄」からお蔭を蒙つてゐるのがある。『入日には金の真砂の揺れくる』は『こゆりさんの渚にはかねの真砂ぞ揺れくる』や『こがねの真砂は数しらず』から採つた。『命をはりゐる』の句は梁塵秘抄中の『めいをはる』の句と法華経の『命をはれる後忽然として化生す』から採つた」とある。

（注8）『作歌四十年』、『全集』第一〇巻、四二〇頁。

（注9）このほか、後期印象派の絵画やロダンの彫刻、ニーチェなどの生の哲学、仏典、芭蕉俳諧なども当時の茂吉の視野に入つてゐた。『斎藤茂吉集』（日本近代文学大系第四三巻、注釈者 本林勝夫、角川書店、昭和四五年一月）に拠る。

（注10）例えば、木俣修は、「臨海小景」「山中秋景」を引用し、「当時の白秋の歌にはいちじるしく仏讃的なところがあつて、これらの歌などにも自然の中に仏の光明を見ようとしているところが見られる。『梁塵秘抄』の影響が濃くあらわれている」（「白秋と島木赤彦」、昭和三〇年三月「短歌」と指摘している）。

(注11) 北原白秋選『斎藤茂吉選集』の序で、白秋の方からも『梁塵秘抄』に触れた以下の発言をしている。「『赤光』が出た時は、私はやはり見桃寺にゐた。(中略)是より先、私は梁塵秘抄を耽読して、その古風の言葉と形式とが作る一種特別な金色の円光の環に惚ればれと喜び涵つてゐた」。茂吉選『北原白秋選集』の原稿が先に仕上がった経緯から、それに応じる形で白秋が触れたとも考えられるが、いずれにせよ、この互選集において双方から『梁塵秘抄』に触れているのは興味深い。互選歌集からの引用は、それぞれ大正十一年一月にアルスより刊行された初版に拠った。

(注12) 白秋が「アララギ」にはじめて寄稿したのは、大正三年新年号であり、作品は「地面と野菜」と題する一連である。

(注13) 柴生田稔『斎藤茂吉伝』(昭和五四年六月、新潮社)は、茂吉と白秋との「本当の交流」の時期を、「大正二年以後、『桐の花』『赤光』の後」として木俣修に賛同している。

(注14) アンケートの回答は、「物言はぬ金無垢の弥陀の重さよ」の表記。後に『真珠抄』に収録。『白秋全集』(全三九巻・別巻一、一九八四年二月—一九八八年八月、岩波書店)は、初出について未記載。

(注15) 横尾文子「白秋と『梁塵秘抄』」、佐賀女子短期大学「研究紀要」第二五集(一九九一年三月)。横尾にはこの他、「北原白秋、その精神の軌跡」(鳥居フミ子編『伝統と創造』(一九九六年三月、勉誠社)所収)がある。

(注16) この書簡は、岩波書店版『白秋全集』に未収録。(注

14) 参照。引用は、大正四年四月の「アララギ」に拠った。

(注17) 「山蚕」(昭和三年二月「文藝春秋」、『全集』第五巻)。

(注18) 両者の関係については、黒江太郎『隆応和尚と茂吉』(一九六六年九月、郁文堂書店)に詳しい。

(注19) 前掲書。(注9) 参照。

(注20) 新聞は、「茂吉と『梁塵秘抄』」(月報一四、『全集』第二七巻、昭和四九年二月、岩波書店)において、本稿同様、茂吉の仏教的なものへの親近感に注目している。「まず茂吉の『秘抄』との出会い以前に、時宗教団の伝えた古和讃への親しみが既にあつたらしいことは注意しておくべきであろう」。

「茂吉の『秘抄』受容の下地に、このような、和讃乃至浄土教信仰への親近感があつたことは認めておかねばなるまい」。ただし、本文で示したように、新聞は「深い衝撃」を受けた歌人として茂吉を位置づけ、本稿とは意見を異にしている。

(注21) 『作歌四十年』に、「たかはら」(制作年 昭和四年、五年九月)所収歌を解説して、「梁塵秘抄あたりの歌謡、芭蕉俳諧などの混入もあらうとおもふ」、「結句の『とこそ聞け』の調べには、どこかに梁塵秘抄あたりがにほつてゐるか知らん。作るときには毫も気づかなかつたが、只今読みかへして見てそんな気がした」とあり、『白桃』(制作年 昭和八年、九年)所収歌に触れて、「梁塵秘抄のやうな仏教的文学の影響も必ずあることとおもふ」と述べている。

(注22) 前掲『斎藤茂吉』、八三頁。